

三河 アララギ

平成二十七年

新年号

第六十二巻 第一号



ニューヨーク日記(99) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

November 27, 2014 : Happy Thanksgiving!

Blue Shoe Diaries



サンクスギビングデー、本当は七面鳥を焼いて食べるのが習慣なんだけど家は鍋!友達呼んでしゃぶしゃぶディナーにしました!日本の肉屋さんでちょっと良いお肉頼んで、せっちゃん特製の鶏団子もお鍋に!美味しかった~今年も良いサンクスギビング過ごせた!さあ~これから一気にクリスマス気分だね。

Happy happy thanksgiving!! Instead of turkey, it's shabu shabu hot pot for us! Got some deelyish beef sliced for shabu shabu at Japan Premium Beef and Setsuko made her magical chicken meatballs. Another awesome Thanksgiving with friends! Now, ready or not, here comes Christmas.

目次

第六十二卷第一号(通卷七三三号)

表紙 竹	ニューヨーク日記(99)	感銘歌 御津磯夫第十歌集	歌集「スモン」	花雪	光粒子	山茶花 梅雨	お墓参り	焼芋	ふる里の友	ガーベラ	我は問う	ニホンイタチのメス	二度花	菊づくり	次郎柿	占有	虫時雨	早くも霜月	わた菓子	篠突く雨	先島芙蓉	銀杏	あなたもあなた	永平寺咏	ロボット	葛の原	『いとよせ』	私の一首
------	--------------	--------------	---------	----	-----	--------	------	----	-------	------	------	-----------	-----	------	-----	----	-----	-------	------	------	------	----	---------	------	------	-----	--------	------

今泉 由利 (1)	Blue Shoe (2)	大須賀寿恵 (4)	岡本八千代 (5)	今泉 由利 (6)	弓谷 久枝 (7)	青木 玉枝 (8)	内藤 志げ (9)	林 伊佐子 (10)	安藤 和代 (11)	伊藤 忠男 (12)	遠藤 脩子 (13)	清澤 範子 (14)	足立 晴代 (15)	鈴木 孝雄 (16)	富岡 和子 (17)	森岡 陽子 (18)	近藤 映子 (19)	半田うめ子 (20)	杉浦恵美子 (21)	平松 裕子 (22)	山口千恵子 (23)	小野可南子 (24)	夏目 勝弘 (25)	阿部 淑子 (26)	白井 信昭 (27)	富岡 和子 (28)	いーはとぶ (29)	富岡 和子 (30)
-----------	---------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------

『俳句』	かさね吟行会 十一月	『酔いの徒然』(33)	ある自然科学者の手記(32)	絹の話(50)	物理学者と詩歌の世界(60)	短歌に詠まれた茂吉	楽しい時間(26)	永平寺と斎藤茂吉	「水魚」のことから(168)	ことのはスケッチ(433)	編集室だより(二〇一四年十一月)	編春	和菓子街道(99)	お知らせ・編集三河便り・三河アララギ規定	森岡 陽子 (30)	山口千恵子 (31)	弓谷 久子 (31)	松本 周二 (32)	山元 正規 (32)	川井 素山 (32)	重野 善恵 (33)	田中 清秀 (33)	森岡 陽子 (33)	米田 文彦 (34)	和田 勝信 (34)	小柳千美子 (34)	植村 公女 (35)	小池きよし (35)	柳田 皓一 (35)	田中 清秀 (36)	丸山 醉宵 (38)	大橋 望彦 (40)	今泉 雅勝 (42)	鮫島 一石 (44)	山本紀久雄 (46)	夏目 勝弘 (48)	岡本八千代 (50)	今泉 由利 (51)	三河アララギ (52)	平松 温子 (53)	和菓子街道(99) (54)	お知らせ・編集三河便り・三河アララギ規定 (55)	富岡 和子 (56)
------	------------	-------------	----------------	---------	----------------	-----------	-----------	----------	----------------	---------------	------------------	----	-----------	----------------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	-------------	------------	----------------	---------------------------	------------

感 銘 歌

御津磯夫第十歌集「御津磯夫歌集」

短か日の没り日のさして華やがり散りおくれたる楓の紅葉

P 149

裸木の奥になびける竹の秀をわが冬の日の見るものとする

P 151

歌集 「スモン」

大須賀 寿恵

女教師の悲しみかたみに云い合ひて冷えはは足より肩にまで来る

くれないの萎えたる花を三つ落しカニサボテンは今年の花を終ふ

池の面の今朝のうすら氷音たててわがそそぐ水に沈みゆくなり

花 雫

蒲 郡 岡 本 八 千 代

咲き出しし冬の陀^ダ兜^{チュラ}囉の花雫落ちず光^{しだ}れり垂^{ささ}れ花の端

冬ざれてまた咲き出ししわがダチュラああ文明先生御津先生よりの

ぼつぽつと時雨るる中のわがダチュラその花雫の白ひかりかな

二人とも同^{おな}い年にて老いにつつ夕べダチュラの花雫の前

夕暮の庭に佇ちゐて受けとりぬああ噫^{ああ}道後鉄道の駅の絵ハガキ

子規の頃の道後駅の絵ハガキか此の一枝のわが嬉しさよ

いつかまた「子規を尋ねて」の一人旅思ひつつ未だ果さぬ老いらく

しみじみと道後の絵ハガキ見るうちに子規をば尋ねむ憧れ慕る

子規の伊予に必ずゆけると信じつつ暮れゆく空の下を離るる

わが先祖寛永時代と知りたるにさほどに遠き昔と思わず

光粒子

東京 今泉 由利

空高く一万メートルより降りきたりまず携帯の電源入るる

桜葉の落ち重なりて裏表錦の階段登りゆくゆく

蛍光の素質持たざるトレニアの蛍光色に咲くを嘆きつ

ひと粒の光粒子のあつまりに温々温し日向ぼっこ

和三盆片栗葛寒梅粉木型に打ち出し落雁ですよ

雁の絵を口に含めり溶けきたり三井晩鐘聞こへくるごと
みいのばんしょう

髪の毛の細きを彫りゆく忠実に聖観音の結び髪です

一両も十両百両千両とそれぞれ赤実たわわの万両

父母にあひあはむための新幹線父母亡くして今日は乗りをり
ちちはは

快速も特別快速もいでゆきぬまだまだまだ待ちをり普通列車を

山茶花梅雨

豊川 弓 谷 久 子

曲がりしは曲がりしままにと言はれたり御津先生は花を活けつつ

式典のあとは運動会に盛り上がる明治節なりき今日文化の日

みのり田に稲刈る父と母のゐる小学生の我もゐる夢

父の手を真似て錆鎌研ぎて見む古き砥石を探す物置

秋深き空にうつすら昼の月金子みすずの詩を口ずさむ

車椅子のままに車に乗せられて姉は三日間のショートステイ

車中より姉が小さく手を振りぬ見送る我に手を振りて行く

この雨が山茶花梅雨か一日をこもりて過ぎてはや日の暮るる

いつせいに芽吹きし春よいつせいに黄葉となりぬけやき並木は

襲ひ来るあの日の恐怖まざまざと三河大地震子に語り置く

お墓参り

新城 青木玉枝

今日ひと日お墓参りの許可を得て一路墓地ある岬霊園へ

介護士の車に乗りて一号線彼方の海へ手をかざし見る

霊園への道はなつかし七曲り松風うけて秋のひと日を

手すりなき石段見上げ二十段介護士の手をたよりつつ登る

「お父さん来ましたよ」なでる墓石三十年前私が立てた墓石に

誰かお参りしてくれたのか供花も枯れずに草もきれいに

秋彼岸すぐれば日毎夕暮れの早くなりたり山里に住み

人生の縁結びし夫逝きて九十才越ゆ残生わびし

玄関を出でて人なき道に出でわたしは誰と逢いひたいのかしら

裸木に小鳥が止まる雨上り秋も逝くのか冬も間近し

焼 芋

豊川 内 藤 志 げ

それぞれに三角の線を残して進む水鳥を眺め放水路の上

みかんの畑草を燃やして芋一つ棒もて返す日の暮早し

あつあつの焼芋一つ前掛けに包みて帰るみかんの畑より

夕やけの残れる空に三日の月あつあつ芋を抱きて帰る

空見上げ歩み始めり上野坂下る所にて本降りとなる

修理屋の電話の声はオカマまで充分油を注せ云いたり

垂るるほどミシンのオカマに油注すりズムよき音かろ軽やかな音

この店は廣きがうれしと妹は車椅子にてスイスイと行く

片手にも着られる服をと妹はセータの延を入念に選ぶ

車椅子廣き売場のセーターにズボンに次は何を選ぶか

ふる里の友

岡崎 林 伊 佐 子

ふる里の友もいつしか後手を組む癖つきて農にはげみぬ

をさな名に呼び合ふ友も健やかに米寿となりてふる里に住む

離村して廃家となりし隣り家の亡き人しのぶふる里にきて

古き家の壁にからみし葛くずの葉が五色に彩どり秋も深まる

石ころの山坂のぼり摘みてゆく木枯らし吹きて野菊が匂ふ

畑仕事あるから健康たもちゆく飽食の世に野菜は豊作

具の多きみそ汁このみて自作する野菜つみゆく朝光さす前

この年の天候異変にふる里は何処の家にも渋柿はなし

凶作は現在未来の出来事と過疎の村人なげきてをりぬ

鬼灯の朱実をくちに鳴らすとき母亡き戦後の幼な日おもふ

ガーベラ

豊川 安藤 和代

食卓のあきし夫の座退院が明日に決まりてガーベラ飾る

退院した夫居る事を確かめてまた確かめて眠りにつけり

車椅子の夫とドライブ三河湾風の香りが美味しいと言う

波に身をまかせて眠る海鳥に晩秋の陽はキララに注ぐ

寒き夜は熱あつシチューは美味しいと三人の孫のおかわりの声

山茶花の蕾の先はひな人形の口もと程の紅が見ゆ

生徒会長当選告ぐる外孫の電話器の声を抱きしめて聞く

庖丁の使いもなれて孫の手にリンゴの皮はするするとあり

子も孫も夫とも囲む鍋に立つ湯気の中には幸せを見る

木守柿熟れうれなるを鴉の逆立ち姿でついでみてをり

我は問う

大阪 伊藤 忠男

秋風にコスモス揺れる野の道も今や霜降り人ひとりなし

我は今何を夢見て何思う何を残して何求めるか

朝もやに霞む町並み灯りあり今はあさげの仕度どきなり

ナフタリン香る車内も衣替え飾り早くもクリスマスツリー

冬晴れの温もり恋し陽当たりを探して歩く路地裏の路

我に告ぐ今が青春心意気さらにさらにと追い立てる日々

我は問う流れ流れてたどり着く永遠の棲家は今あるここか

カーテンを揺らす霜風冷たさを頬に残して立冬を知る

今年また秋から冬に後わずかあれもまだなりこれもまだなり

外国の原料頼る輸入国なのに円安何が嬉しや

ニホンイタチのメス
蒲郡 遠 藤 脩 子

あれは何庭隅を素早く走る細長い黄色の動物あれは何
足短か尾と胴体は同じ長さ黄色一文字に走りぬけたり

パソコンで調べて夫はオコジョかもとカラー画面を我に示せり

その毛色体長三十センチが決め手となりニホンイタチのメスで落着

目の当たり鼬鼠^{いたち}を見たり庭隅の落の葉揺らし黄色真一文字に

勤め終へて外に出れば暮れ早く東の空に後の月十三夜

その根元に緑のオキザリス繁らせて鉢植えの桜赤黄にもみじす

開け放つ居間より見ゆる霜月の三河の海の銀の輝き

曇り日の朝のひととき小鳥群れ榎の大樹に地鳴きの止まず

崖ぎわのクリスマスホーリー陽ざし受けて数多の赤実艶光りたり

二度花

春日井 清澤 範子

リハビリに堤防の道歩みゆく諸草の中に萩の紅くれなひ

大判のシーツ洗ひて竿に干す見上げる空の高き青さよ

柿の葉は色づき始む吹く風に赤黄青の色くるくると舞ふ

狭窄症の手術せしこし三年と夫は今も湿布剤をはる

吾が歩く道辺の田にはひこばえの切株そのまま青々として

寒気入り初霜報ずる新聞に吾が故郷ふるさとの香嵐溪のにぎわひ

八王子神社の舞台に腰をかけ心和むよ歌書きをれば

娘には頑張れ頑張れ励まして吾は神社に祈り祈りて

幾回も履歴書送り面接し採用通知の電話弾みぬ

木犀の二度花つきて匂ひ来るいつしか虫の声の聞こえず

菊づくり

東京 足立晴代

コスモスのゆれゆれ動く花ぞのに過ぎゆく秋の風吹きて

秋深かし樹々の照葉も色映えて錦の山々今盛りなり

千代紙の小箱づくりの柄合せひねもす過す時を忘れて

遠き道歩きなれしか近くなり米寿忘れて早足となりぬ

友人と楽しく食すあげまんじゅう香り豊かなほうじ茶と共に

秋に入り詩吟はじめて初吟詠のどなでつゝも吟ずる楽しさ

いも煮会山形の味のびつゝ集いし友のさざめき楽し

街路樹の銀杏黄ばみて美しく思はず仰ぐ澄みたる空を

大輪の菊花に乘せし被綿のふくみし露の清らなるかな

菊づくり世界に誇る伝統の日本の文化輝きわたり

次郎柿

沼津 鈴木孝雄

フォーラムで白隠さんの人柄知り今も通ずる教え学ばん

磯菊のつぼみ日に日にふくらみて黄色に輝き今咲かんとす

次郎柿豊橋産の名札見て中身確かめず袋買いつける

間引きした春菊の苗味噌汁に菜園冥利の苦味と香り

晩秋に濃い紫の花咲かす秋ナスまだまだ楽しめそうだ

注ぐ湯の音を聞きつつうとうとと来し方懐う下部の岩風呂

下部の湯ザブンと入る勇気なく腰胸首と冷たきなじます

紅葉のグラデーションが秋深め兼六園は小雨に煙る

久しぶり友との再会金沢の地酒と地魚に話は弾む

白川郷ここは何処かと想うほど飛び交う言葉は中國の人

占有

東京 富岡和子

だんだんとけやき木の間は橙に朝の感謝に味噌汁作り

ひと色の落葉に混じる山茶花に冬物を干す昼の縁側

きこえ来る枯葉ふる音公園に友らとシャベルし早や葉牡丹を

すすきの穂夕日さしきてカーテンと露天の湯舟友と占有

薄暮なり宇宙ステーション一分間板室^{イタムロ}上空で観望の幸

風さやか三百年の松の枝にカシオペア三角四角天の川あり

ありがとう五個の果実はマイルビー秋の陽うける美男かずらに

あらあら！綿菓子だらけ青に白障子の向こうの雲たちのショー

目黒区と杉並地産の柿食す果肉の味は歴史と柄が

百三才多くをなした友の母何事なしよ遺影平安

虫時雨

東京 森岡陽子

川沿ひに並ぶ桜の葉の色はやっと色づき秋の絵描く
寺のすみ無縁の墓が重なりて石の塔なる夕日淋しや
秋うらら愛宕神社に参拝すこの階段を馬が駆けたと
石像のひょうきん狸の足元にすっかり咲きし枝垂れ紅菫
秋晴れにアクアラインを走り行く海原広くどこまでも青
タンカーや釣り船行き交う海ほたる光の中に水脈重なり
青空に秩父の山は幾重にも紅葉の濃淡絵筆持ちたく
木洩日に三峰神社輝きて荘厳な気静かに参り
菊祭り大臣賞や特賞と珍し色や手毬が如く
旅行誌をめぐり行きたや紅葉季夕方なれば庭虫時雨

「早くも霜月」

名古屋 近藤 映子

日本の学者三人ノーベル賞を受賞のニュースはほのぼのと

霜月とも成れば朝夕気温は下り羽織る上衣の一枚要す

冷んやりと朝の空気をベランダに深呼吸をして今日の始り

我身をば今だにしる「しびれ痛」特に右手の不自由強し

紅白のミニシクラメンの鉢求め我八階の小さなかがり火

霜月と成る朝の低温は吾七十九歳の身に沁み入りぬ

何年も夫居ぬ日々に慣れ居るに見舞う場所なく孤独の一潮

霜月の晴れの日ざしはリビングに斜めに射りてシクラメン輝く

霜月も中葉過れば冷え込みて見降す紅葉ハタと散りゆく

今はもう何処の病院に行きたれど夫は居ないと吾知り居るに

わた菓子

新城 半田うめ子

枯草をもやしゐるらし元宮の近くに上るけむり美し

わた菓子を子供の頃にて食みし日を思ひだしつつけむり眺むる

わが畑の中に来たりて時折りにすわりて居りぬ男性一人

年毎に視力のおとろへ西川の川辺を歩くもとぼとぼとして

西川の川辺に咲きをり花の名前思ひ出せずに赤き花なり

安城に知人ありたり味のよくうどんをいただく楽しみ食みをり

篠突く雨

蒲郡 杉浦恵美子

繰り返しこれが本日終電と車内放送未だ午後三時

台風が追いかけて来るこの電車大阪までは後一時間

待つ人の居らぬ我が身の気楽さよ帰るのもよし泊るのもよし

岡崎と蒲郡間二十キロ電車が止まれば果てなく遠し

闇の中篠突く雨がクルマ打つ音のみ聴こゆ我が家は遠く

さんさんの豪雨の中に辿り着く我が家は闇にもゆるぎなく在り

博物館火鉢に手かざす俊成像くぐもり声に今しも語らる

俊成卿竹谷荘に暮ししか八百年も昔すべて茫々

八百年すべて茫々その中に俊成の歌確かに残る

ガソリンも満タンはてさて何処行こう予定もないし小春の日和

先島芙蓉

豊川 平松 裕子

照りて翳る陽のなすリズムに我が庭の黄葉となりたる木槿揺れをり
朝よりの雨は上がりぬ庭に出で風に吹かるる黄葉を見てり

屋久島より吾子がもたらしし稚木わさなぎの先島芙蓉は早や十数年なり

年ごとに我が背丈程に切りつめて冬を越し来し先島芙蓉

一つ二つ色褪せし花をつけてをりバレリーナの名を持つバラは

緑葉を夏より保ちこしキャッアイ今年はつひに花つけざりし

枝先にはつかもみぢ葉残りゐて枝垂れ桜は裸木となる

雨上がり日の射しくれば裸木となりたる桜の辺り明るし

夏の日と変らぬ大きつばみ持つ高砂百合ひともしの一本に会ふ

下葉枯れ花ほつれつつ藤袴なほ直ぐ立てる冬の日の庭

銀杏

豊川 山口千恵子

黄葉する休耕田の大豆の葉田の原広し秋の日あまねし

葉の落ちし大豆に多くの莢見ゆる豆となる日も間もなくのこと

箆に干す小豆を手にてすくひみるやはらかに照る秋日に暖くし

紙袋に入れし銀杏爆ぜ始む電子レンジを二分にセットし

ほろ苦き銀杏の実食べてみる中学校のバザーに買ひし

説明書見つつ焼きたるパウンドケーキ電子レンジのオーブン機能に

まあまあの味なり一人味見する初めて焼きしパウンドケーキ

来る年より稲作止めむ相談を農協事務所の片隅にしてをり

われらには稲作は無理と思ひつつ今年産の玄米運ぶ

倒れつつ皇帝ダリアの花の咲く花びらひらひら真近に見る

あなたもあなたも

豊川 小野可南子

川水の見えざるまでに白ましる呆け芒の佐奈川河畔

技芸天に先ずは拝さむ境内に敷きつめられし小砂利踏みゆく

風音も人声も無き境内に四十雀等の飛びたつ羽音

淡き緑の苔は銀にも見ゆるかと秋篠苔と一人思ふも

二月堂の舞台に見放くる奈良の街黄金の色に輝やく銀杏

かの時は岩船寺よりここ浄瑠璃寺あなたもあなたも歩き通して

池水を隔てて九体阿弥陀堂を我十有余年の時空を越えぬ

過去現在未来を思ふ縁なり九体阿弥陀佛の御前に額づく

過ぎ去りし日々のことごとと思ふ時四十八歳の母に会ひたし

我母の命日に生まれしこの息子つくづくと思ふこの四十八年

永平寺咏

豊川 夏目勝弘

権力と富より離れし道元の厳しき戒律も乱るる時代

参拝の作法三つを説く若僧そを守らぬ若僧も居り

黒ぶちの眼鏡をかけし若僧のいといと多しいぶかりにけり

秋の日の差し込む三百畳の本堂に我が名読まれ祈願のつづく

永平寺の一番大事な料理とか常に吾が喰ふうどんとぞあり

杉巨木に暗むるなかに差す秋日いまを盛りとカエデのくれない

参拝者の行交ふ寺を逃れきぬ音なく落つる滝のま近かに

志比川しかはの瀬音の響く谷間たにあいの雄雄しき道元の十代の像

土産屋に向ふ仲間と別れきぬ谷間たにまの鐘楼にて鐘を一つ撞く

我が撞きし鐘の響きは谷川の瀬音に共鳴することのなし

ロボット

横浜 阿部 淑子

円光寺境内覆う紅葉こうようを苔の緑が引き立てている
ケーブルに乗りて紅葉眺めつつ自然美に酔う三分間よ
本門寺の朝市賑わう店々は復興支援の力溢れて
練習を重ねて臨む合唱祭指揮棒見つめハモリも見事
人工の声帯で歌い会話するロボットの躍進人間代交

葛の原

豊川 白井 信昭

秋日さす晴れ晴れと庭の物干しに布団カバーの白き輝き
稔田はコンバインにて刈られたり藁の粉粉著けき匂い
堤防を歩み下りて高架下尾花が先に風渡るなり
十五夜の月に照らされ堤防を犬とゆきたり行在所跡
国道のなだり一面葛の原葉陰の中に濃紫立花

『いっしょに』

(西浦公民館 いーはとぶ)

ひととせの心の空白多くして夫の一周忌はやも過ぎつつ
わが夫の声音の記憶うつろうつろまた秋が来て白菊かほる

三田美奈子

嫁入りの西陣の帯解きつつ母は呟く己が身の始末を

白銀に抱かれしあの二ノ池も今は思い出ああもくもく灰色

水野絹子

杜子春のオーデイションにと挑む孫祖母のわれをば相手にせんとす
嵐去り春日山より眺むれば三河の海は未だ白波

牧原規恵

昼過ぎの時雨の雨に肌寒し音を聞きつつ衣替への私
下校時の電車の内は女生徒らのさざめく声に華やぐ一角

稲吉友江

元気なきあなたの電話の声のあり窓に映れるうす茜空
いつまでも仰ぎてゐたしこの青空セーヌの流れの上の深空^みを

鈴木美耶子

幼とわれ金比羅宮へ詣でむと息切つてのぼる長くも高きこの石段を
神無月中置の釜の炭火赤し若き娘子の炭手前見まもる

吉見幸子

金山のコンコースにて待ち合はす娘も我もスカート姿
夜の街ネオンかがやく中を歩む私も少しはミステリアスに

牧原正枝

台風すぎ秋の季節に一気に新米コシヒカリ今宵は炊かむ
奥三河の山間^{やまあひ}の家だんだんと閉ざされし家此処も彼処も

岩瀬信子

しまひ置きしお揃ひのティーカップ今宵出して熱き茶を入れ従姉妹を偲ぶ
道の辺の草々冬枯れ色になり草の葉裏のこほろぎは軀^{むくろ}か

石田文子

ちやらぼこの男子^{をのこ}の太鼓に乘せて吹く少女^{をとめ}ら杵に笛の音高く
しつとりと肌に心に染みる如し高原の湯も青葉^{もみぢ}も紅葉も

森厚子

夕暮れて冷え冷えの風吹きてくるフジバカマの花ほのかかほりて
楽しいと思ひ出あまた書いてある幼の文よコスモスも描きて

山崎俊子

私の一首

友の個展ながき想いの結果はかなの細字で光源氏を

いずこへと大雨予報それで行き墨の百様旧友の輪

富岡和子

喜寿の私とクラスメート。それぞれの役目を似合ったスタイルで果し、茜の空を真にきれいと感じ一日終る昨今。終戦時、八才戦火と食料難を経て脱脂粉乳は思い出話。六十年來の親しい友が個展をしました。我が事の様にくれしくお手伝い。去る六月七日大雨注意報大変心配でした。予報ほぼ外れ三日間盛会。私宛の礼状は巻紙で、宝物に。戦後七十年良き日本に私共は暮し居ります。すべてが感謝となり毎日を大切にしています。

明るくも屋根うつ音に雨気配狐の嫁入り干し物しまわず

森岡陽子

今夏は急に暗くなり、ゲリラ雨、夕立、雷雨、と限られた地域に突然雨が降り出す事が有り、外出時は軒下を捜しに走る事も度度だった。家では急いで洗濯物を取り込むのに大あわてドタバタ。しかも、そんな雨とは違い空は明るいまま、まるで雨粒が数えられる様な大粒の雨がパラパラと降る時も多々有り、すっかり慣れてしまい、全くあわてず、ドタバタせず洗濯物もそのままに、いちいち仕舞う事もなくなってしまった。昔、こんな天気を狐の嫁入りと教えてもらった事を思いだした夏でした。

金色と赤き鯉二匹ゆつたりと水豊なり音羽川の朝

山口千恵子

散歩の途中、涼しい朝の風に当たりながら、音羽川の川面を眺めていると、どこからやってくるのか、金色と赤の大きな鯉がゆつたりと泳いでいる。黒っぽい鯉の隣の群の泳いでいるのも見える。堰が止められているのか、流れも豊かにゆるやかで、小波が立っている。しばらく橋の上に立って流れを見つめていた。何となく心豊になった感じがしながら、今歩いて道を戻りはじめた。

始めての真夏の京都古都の夏四季それぞれが胸に行き交ふ

弓谷久子

京都に生まれ育った古い知人から「京都の夏は只暑いだけ」と聞かされていましたが誘われて始めて真夏の京都を訪ねて見ました。

青空に高く伸びた竹林の中に涼しい風が吹き渡り月おくれの七夕まつりに賑はふ鴨川べりを子に腕をとられてそぞろ歩きし、夏には夏の楽しみを発見出来て楽しい旅となりました。夏の京都も又捨て難いと思いました。

『俳句』

短日の大樹の峙賑へり

松本周二

親子孫芋の三代洗ひをり

新築に日章旗上ぐ文化の日

冬ぬくし金箔残る羅漢の眼

山元正規

七五三従者六人引き連れて

短日や独鈷の滝の水かけろふ

大根畑施肥する背に夕日さす

川井素山

小坊主が諸を氣にする落葉焚き

浮寝鳥をちこち文字のごと並ぶ

羅漢寺にほろ酔ひ顔の夫おはす

重野善恵

門の錠閉まるを小鳥見てをりぬ

日暮れ道秋刀魚匂ふや大根買ふ

欄干に雑巾並ぶ小六月

田中清秀

胸開く五百羅漢や冬温し

方丈に一声鳴きて寒鴉

冬浅し羅漢の顔に父重ね

森岡陽子

幾重にも広広染むや秋の山

山間に木守りの柿のある畑

晴れやかな顔居並びて菊臚

米田文彦

帰る子に母の持たせし茸飯

旧街道末は花野に紛れけり

子供らの飛び跳ねて来る村祭

和田勝信

わんぱくも祭り木札や秋日和

秋晴れや法被の子等に親の笑み

長々と貨物列車や冬菜畑

小柳千美子

亀の背に冬日ようやく届きをり

熊見たと広報車告ぐ塩の道

秋天の谷底にゐしバス待つ間

植村公女

足音を確かめたくて落葉踏む

小春日や介護認定決まりをり

柿落葉踏みて茶室の客となり

小池きよし

緋袴の搔きて落葉の万華鏡

ぐい飲みの掌に馴染む夜や初時雨

山茶花のさかんに散積りゆく

柳田皓一

枯菊や倒れたままに置かれけり

山盛りの蜜柑に誰も手をださず

かさね吟行会

「蘆花恒春園」 十一月

田 中 清 秀

徳富蘆花は肥後熊本で明治元年（一八六八年）に生まれ、明治四十年から昭和二年まで約二十年間当時まだ草深かった千歳村粕谷（現在は世田谷区）に妻愛子と伴に居を構えた。

平成二十六年十一月二十五日、今回のかさね吟行会はその徳富蘆花を偲ぶ「蘆花恒春園」で行なわれた。生憎の雨と寒さの厳しい日であったが集合時間の十一時には全員京王線蘆花公園駅改札口に参集した。参加者は松本周二、川井素山、山元正規、今泉由利、森岡陽子、小柳千美子、重野善恵、山迫京子、と筆者の九名である。

蘆花恒春園は、蘆花の手植えの孟宗竹の清々しい竹林やクヌギやコナラなどの雑木林、寄贈された蘆花の身辺具・作品・原稿・手紙などが展示されている記念館がある。さらに園内には大きな茅葺屋根の書屋、電球の室内

灯に障子と廊下を挟んだガラス戸の旧宅建物などがあり明治大正の時代に引き戻される。庭園は笹が茂り冬枯れの木立や落ち重なった紅葉が冷たい雨に濡れて輝き趣をそえている。また、千両の実が花の少ない冬の庭に紅熟している。高浜虚子の句に「手で顔を撫づれば鼻の冷たさよ」とあるが正に今日の気候である。

文豪の茅屋かざる実千両

周二

懇ろに落葉掃かれし蘆花旧居

善恵

冬の雨昼も灯ともす蘆花旧居

正規

徳富蘆花は小説「不如帰」の作者として有名で他に「自然と人生」「みみずのたわごと」などの作品を残した。明治四十年不惑の年文豪トルストイの影響を受け農業生活を送ることを決意しこの粕谷の地に移る。旧宅建物は母屋・梅花書屋・秋水書院に分かれているが全て廊下で繋がり室内を自由に見学できる。中には洋風のベッド、テーブル、書棚などに加えて蘆花直筆の書や絵画も展示されており貴重な遺品の数々に時を忘れる。廊下に並ん

だいくつもの火鉢はこれから迎える冬の準備であろう。

文豪の翳む遺墨や冬ざる

清 秀

長廊下ずらり並びし火鉢かな

千美子

生きたいわなぜ死ぬのでせう実万両

由 利

思想家でジャーナリストであった兄の徳富蘇峰の下で自然詩人として出発したが次第に国家主義的傾向を強める兄と不仲となり絶縁する。「富」の点のない漢字表記はそのこだわりと言われている。昭和二年療養中の伊香保温泉で蘇峰と再会し和解、その後死去享年五十八歳。その亡骸は千歳村粕谷に帰り地元の人々の手で敷地の一角に手厚く葬られ、蘆花恒春園の東側に夫妻の墓が残っている。蘇峰が銘を読んだ墓碑がクスギの木立に囲まれ静かに佇む。

芦花公園の十字の墓や冬の雨

京 子

墓石に刻む十字へ落葉かな

陽 子

冬の雨疎らな色の園の景

素 山

句会は蘆花の愛子夫人の旧居宅を改装した会議室で行なわれた。部屋からガラス戸越しに庭園が眺められ句会にふさわしい会場である。まず手持ちのお弁当やおにぎりで腹を満たし、しばらく休憩のあと囑目三句いつもの句会となる。

■かさね吟行会■

日時 2015年1月27日

場所 浜離宮恩賜庭園

集合 庭園内 芳梅亭 午後1時

申込 森岡陽子宛 (03)3712・2835

『酔いの徒然』（三十三）

丸山 酔宵子

『秋のポルトガルを行く』

ポルトガル語の「OBLIGADO（オブリガード）」と言う言葉は日本語の「ありがとう（ARIGATOU）」を由来にするということをご存知ですか。

500年前の鉄砲伝来、キリスト教の布教と、日本が西洋に門戸を開いたその時代は、日本は、ただ只管、一方的に西欧文明に驚愕し目覚めたと思いつつ続てきたが、日本文化も同じように西洋社会に影響を与え、特にポルトガルを通じて西洋に文化を伝えてきた一端がそこにある。事実は、それほどまでに、500年前の日本とポルトガルの関係は深かったのである。

ポルトガルには残念ながら日本からの直行便は無く、ロンドンからリスボンへ。昨夜はリスボン旧市街の石畳の坂にあるファド（FADO）ライブが楽しめる由緒正し

きファドレストラン（CLUBE DE FADO）の、バカヤオ（干し鰯）を戻した出汁で料理する典型的なポルトガル料理を堪能し、いよいよファドライブのスタート。ファドは、フランス・シャンソン、イタリア・カンツォーネと並ぶ世界的民族歌謡で、ファドとは「運命とか宿命」を意味している。船で旅立つ男を思い、哀愁を込めて切々と歌い込んでいくのである。時間はもう既に午前零時過ぎ。ポルトワインを飲みながら、マイクなしでの哀愁溢れるパフォーマンスは、「石川さゆり」の『天城越え』を彷彿させ、時差と疲れの眠気を吹き飛ばす迫力……。ポルトガルの夜は長く、延々とファドが続くのである。

ポルトガルの秋はまだ浅く、日中の陽射しは夏を思わせる。リスボンとテージョ川を隔てて対岸のアルマダを結ぶ、大きな吊り橋である Ponte 25 de Abril（4月25日橋）を通れば、リスボンの大きな太陽がテージョ川の上流に沈みかかっている。

目指す今宵のレストランは、橋を渡った対岸（アル

マダ）岬の先端にある、ポルトガル海鮮料理 PONTO FINAL RESTAURANT（敢えて日本語に訳せば、『岬最後の舳先の料理屋』とでもなりますか・・・。）ここにもポルトガル語が日本語化した実例が検証でき、PONTOと言うのは船の舳先のこと、京都の先斗町はPONTO（舳先）をルーツとしているのである。

車も通れない長い防波堤を、釣人の成果をチェックしながら、まだかまだかと歩いて行くと、崖に掛けられた鮮やかな黄色の大きな「PONTO FINAL」の看板が視野に入ってきたのである。

崖の麓の倉庫廃屋を改装して造ったような天井高い建物を改装したレストラン。防波堤にはパラソルを立てたテーブルが水際まで置かれている。全て鮮やかなやや橙が買った品のいい黄色（ポイント・イエローとでも言いますか・・・）が基調で実に洗練されていて、何かが起こるのではないかとわくわく感を助長される。

「矢張り、鯛の塩焼きに、ヴィニョ・ヴェルデでしょ

う・・・」大ぶりの塩焼き鯛が6尾、大きなレモンカットと一緒に出てきました。「・・・ウー・・・美味しい・・・ムット・オブリガード・・・」
テージョ川に沈まんとする大きな太陽の横には虹がかっている。

リスボンの舳先（へさき）で食らふ

鯛かな

酔宵子

ある自然科学者の手記(32) 大橋望彦

「戊辰に生きる祖母みつの記録」②

『落人の艱難辛苦』

川は長雨の所為で水嵩を増し、轟々と流れておりました。船が二三艘ありますが逃げて来た人達が、皆われ先と飛び乗り、忽ち一杯に成りました。その内一艘の船は載り過ぎたのでしょ横倒しに転覆してしまい、多くの人達が忽ち濁流に飲み込まれてしまいました。之では危なくて船にも乗れませんので、仕方なく土手伝いに川下の方へまいりました。その内に祖母が後ろを振り返り、苦し息を吐きながらこのように申します。「この様な有様では、とても落ちのびる事はできそうもありません。此の上生き永らえて生き恥をかくよりも、いっその事此処で自害しましょう」と、どつかと土手に座り込み、懐剣を抜き放ち覚悟を決めて中々動こうとされません。それでも母がなだめすかして、ようよう落ち着き、やつとそこから一里余りの所まで重い足を運びますと、高橋の伯母の一行に出逢いました。伯母は、「これから西屋敷という村の知り合いを頼って行くのだが、一緒に参りましょう」と勧めて下さいました。地獄に仏とでも申しましょうか、その時の嬉しさは、今も忘れる事が出来ません。

この村に五日程滞在している内に、越後口の戦いが始まり、危なく此処にも長居が出来ず、北の方へ向つて、再度逃げました。見頃村と言うところへ着きましたのはもう黄昏時で、一夜の宿をと処方へ頼みましたが、落人と見て、泊めてくれる家は一軒も御座いません。重い足を引き摺りながら七八丁も歩いて、やつと一軒の家を見出し、色々頼んだ末、どうにか夜露を凌ぐ事が出来ましたが、なんと宿賃は一人前小判一両という暴利で御座いました。

その上、世間へ知れては大変だから夜の明けぬ内に立ち退いて呉れ、との注文で御座います。翌朝は六つ半前(今の午前五時)握飯を貰い、又当て所無しに北へ北へと落ち延びたので御座います。

吉志田という村に三日ばかり居りました時、出入りしていた大工が処々方々を訪ね、父丹下重光は、城下名子屋町の戦いに於いて深手の手負いとなられました。此の事をお知らせする為に私達の行方を一生懸命探し回ったと申します。聞けば余程の重傷の様子で、生死の程も案じられます。直ぐ様、下男を城下へ走らせ、様子を探らせましたところ、実は二十九日午前手負い、即日城中で戦死されたという事が判りました。一同の嘆き悲しみ、他の見る目も哀れで御座いましたでしょう。杖とも柱とも頼るただ一人の父上を失い、この先どうなるかと考えますと、急に世間が真つ暗になりました。神も仏も無い世の中かと、子供心にも初めて世を怨む心が兆したので御座います。無理からぬ事を存じます。然し、此処に居りましたのもほんの僅かの間で、次には隣國の米沢へと志し、名高い十三峠という険しい山を喘ぎ喘ぎ打ち超えまして、とある掛茶屋で憩いました時、茶屋の婆々さんの口から、『米沢藩は、最早、官軍に降伏した後であるので、貴女方が、米沢領に入られると捕らえられてしまう憂き目を見るのは必定ですよ。早々にお戻りになった方が宜しいでしょう。』と、聞かされ、他に良い方法も御座いませぬので、泣く泣く一同、十三峠を難儀しながら引き返しました。

峠を下り、入柴村という淋しい村に着き、此処で暫く足を止めるつもりで、『金子は何程でも望次第遣わすから』と、泣く様に頼んで見ましたが、官軍のお触れが厳しくなり、剣もほろほろの挨拶で御座います。それでも、気の毒に思つたのでしょう、程遠からぬ石切山に小屋があるからお出でになって御覧なさいと教えてくれました。その場所を探し当てて一夜を明かしましたが、小屋と申しまして石切人夫用として造った粗末なもので、只名の

みの屋根が在るきりでありまして、霜夜の寒さは一入身に凍みるばかりで御座いました。

また、関柴村の山寺に足を止めたことも御座いましたが、此処は小高い山中で、会津の方角が一望に見渡せる場所です。御座います。時折夜分には、真つ赤な火の手が揚がりました。後で聞きましたところでは、此れは会津軍が死に物狂いに戦つておられる最中であつたとの事で、暫く経つと火の手も収まり静かに成つてしまいました。

この様にして、凡そ三十日程の間、此処彼処と彷徨い歩き、死ぬより辛い艱難を続けました。その内に漸く官軍との間に和睦が調い、戦争も終り、何処へ行つても差し支えないと言う事になりました。しかし、城下には諸国から集まつた官軍が大勢居りまして。若い女子などが近寄るうものならば直ぐに捕らわれて、慰め者となつてしまふ危険が御座います。父は討ち死に、家は焼け、頼る親類も散り散りの状態で、敗軍の家族程哀れなものはないと、尽々思つた次第で御座います。

城下より五里程北の喜多方町の町続きに清治袋という村が御座います。其処には昔私共の家より分家した、代々塗り物を職とする親類が御座います。平素は余り往き来も致しませんでしたが、他に頼る家も御座いませんで、仕方なくこの家へ移り、同居する事に致しました。

その時から会津藩士の知行は無くなり、上下の区別も無く一日一人当たり玄米五合に二百文宛て下される事に改められましたので、今迄召し使つていた若い衆も、下男で下女も、夫々手当てを与えて暇を遣わしました。

十日や二十日の間は分家でも厚遇して呉れましたが、狎れるに従い、段々と厄介者扱いにされ、終いには出て行けよがしにされた事も再々御座いました。他には頼る処も御座いませんで、泣く泣く辛抱している内にその年も暮れ、翌年三月十五日に母は安産、私のたつた一人の妹が生まれ、名を『おのぶ』とつけました。

ところが、未だ一と七夜も経たぬ時、不人情な分家の主人が、『家に病人があつて、居間が不足致しますから何れへなりと引き移つて下され』と、言い出しました。詮めて、産婦の肥立つ迄と、泣く様に頼みましたが、全く聞き入れて貰えません。已む無く村外れに在つた納屋のような小屋を借り引き移りました。

一難去つて又一難、丁度その日から私が風邪の為高熱を発し、遂に熱病という事で酷く苦しみました。この時一同の心配苦労は如何ばかりでありましたろうか、ご想像下さい。私がやつと快くなつたと喜びますと、その病が産後の母に伝染して、亦々心を痛めました。産後の心労で体が衰弱して居りましたから病は募るばかり、医者を呼ぼうにも寒村の事故、二里余り離れた金川村にか御座いませんで。隔日に伯母が薬を取りに行きますのにも往復で五里近くの路、女の足では、彼是一日掛かりで御座います。その留守は私が、たつた一人赤子を抱いて、方々へ乳を貰いに歩きました。

その頃丁度田植え時で、農家は一番忙しい時期でしたから、何処へ参りましても、快く承知して呉ませんでした。

ふと思ひ付きましたのは、以前召使つた下男の子が、お産を致した事でした。此れ幸いと、飛脚を差し出して頼みましたところ、早速引き受けて呉れましたので、三里余り離れた山郷という山間の村へおのぶを里子に出して、一と安心致しました。

神の助けか、その内に母も追々快方に向い、外出が出来るようになりました。或る日、小新井村へ参りますと、城下の愛宕町にある大七呉服店の番頭に出逢いました。問われるままに一部始終を話しますと、大変同情し、早速主人へ伝えたものと見え、それより間もなく、大七呉服店から使いが来て、『自分の持ち家をお貸し致しますから、お越し遊ばす様』と、申し参りました。其の時の嬉しさ、世間には鬼ばかりでは無いと、初めて人の情け知つたのであります。

絹の話 (50)

「アトリエテレビ」今 泉 雅 勝

蚕の遺伝子組み換え

〔蚕産業の様変わり〕

かつて、220万戸に及ぶ農家が繭生産に従事して、日本が世界最大の繭生産国であった時代もありましたが、昨今では500戸にも満たない状態で、養蚕指導員、絹の物性研究員など殆どいなくなってしまうましたが、一方蚕を中心とする昆虫機能研究者は国の農業生物機能研究所はじめ各大学や企業で熾烈を極める研究開発競争を繰り返して、多くの方々が従事しています。

蚕は人間が作った生物と言われる様に、その生態、機能育種、病理等解明尽くされていて、最も管理し易い生物なので、蚕を使った遺伝子組み換え研究が盛んです。国際間競争も激しく、多くの研究費が計上されています。日本では養蚕大国時代の蚕に関する基礎研究が厚いので、この道では世界を一步リードしていると言えましょう。

遺伝子組み換え蚕はこれまで隔離された実験室で飼育されて来ましたが、養蚕カイコは自由に飛ぶ事もできず、戸外で自然繁殖は殆ど考えられないので、カルタヘナ法

に基づく野外での試験飼育承認が農林水産省から得られましたので、遺伝子組み換え蚕が生態系に悪影響を及ぼさない事を確認出来たら、新たな養蚕農家が誕生する事になり、管理野菜や養魚の様に大企業の営む付加価値の高い養蚕事業になるでしょう。

〔遺伝子組み換え技術〕

1mm程の蚕の卵に金属針で穴をあけ、ガラス管を通して、穴から別の生物の遺伝子が入った溶液を注入すると次世代の蚕から、その遺伝子情報を反映した新たな繭が出来る、というものです。

クラゲの遺伝子を入れて、蚕の体が蛍光体に光るのに続いて、青色LED（発光ダイオード）当てると蛍光の緑色に輝く絹糸を作る事が出来ました。さらに赤珊瑚の遺伝子で赤く光る絹糸が作られました。

また、蚕にヒト型コラーゲンの遺伝子をいれて、その繭に含まれるコラーゲンから乳液やクリームなど保湿成分が高い化粧品が作られて、従来の魚や豚など動物のコラーゲンによるアレルギー反応のリスクを下げる効果も出ています。

すでに一般化された物で、インフルエンザ検診簡易キットに遺伝子組み換え繭が使われている様です。それ

は口の中の粘膜や尿など採取して、10分程度でウィルスに感染しているか調べる物で、繭の蛋白質が特定のウィルスと結合した際、反応して色が変わる様に遺伝子組み換えした繭なのだそうです。

「蚕が吐き出す」蜘蛛の糸」

クモの糸は高強度で伸縮性に富む（鉄鋼の200倍）という特性があり、抗菌性や解毒作用もあり、絹より優れた繊維と昔から言われて来ましたが、クモは共食いで狭い範囲で飼育が出来ません。しかしクモの糸の機能力が明らかにされて来ると世界各国（特にアメリカ）が遺伝子組み換えで蜘蛛の糸を大量生産すべく開発競争をしています。日本では蚕にクモの遺伝子を入れて研究を進めて来ましたが、蚕の吐く糸の中にクモの遺伝子を持った部分が10%ほどしか入らず、ここ数年足踏みしています。それでも伸縮性など絹の1.5倍位になったものの目標には遠く及びません。

ところが山形県のベンチャー企業が大腸菌にクモの糸の蛋白質を作らせる事に成功しましたので、大手企業が出資参加を始めました。クモの糸は衝撃を吸収する機能が高いので、乗り物やスポーツ用プロテクター、防弾チョッキ等の利用が期待されています。すでにトヨタ自

動車関連では自動車部品の試作を始めています。

既に「クモノス」と名付けられて繊維、フィルム、パウダー、ナノファイバー等の形で供給され始めました。しかし、蜘蛛は伸縮性の高い放射線状の糸や渦を巻いているネバネバの糸、獲物を巻き取る抗菌、保湿性に富んだ糸など7種類の糸をお尻から出すのですが、どの糸の遺伝子が大腸菌に作らせているか発表されていません。まだまだ蜘蛛の糸生産に関してはカイコ派と大腸菌派の熾烈な開発競争は続くでしょう。いづれにしても、人体に優しい親和性に優れた伸びる蛋白質の開発は医療、工業のあらゆる面で有用な物となるでしょう。

【未解決問題】

遺伝子組み換え生物は実験室の中では順調に成果を得られても、それが一般的に産業として成り立つか疑問な部分が山積しています。先ず、組み替え生物が自然体系に影響を及ぼさない事が照明されなければなりません。また原子力のように隔離された場所で可能であっても、その廃棄物処理の安全が確認されなければなりません。それらをクリアする為に、コストの問題が大きいのしかかって来ます。

まだまだ道遠しでしょうか。

物理学者と詩歌の世界 (60)

一石

湯川秀樹「再訪」

物理学者の湯川秀樹については既にこの連載の初めの頃採り上げた(参考資料1)。人文系にも深い素養のあった湯川は短歌など詩歌にも独自の世界をもっていた。今回の「再訪」で、子供向けに書かれた一文と若い頃の詩一篇をご紹介します。

○『詩と科学』(参考資料2)

詩と科学は遠いようで近い。近いようで遠い。どうして遠いと思うのか。科学は厳しい先生のようだ。いいかげんな返事はできない。こみいった実験をたんねんにやらねばならぬ。難しい数学も勉強しなければならぬ。詩はやさしいおかしさ。詩の世界には美しい花もある。おいしい果物もある。しかしなんだか近いようにも思われる。どうしてだろうか。出発点が同じだからだ。どちらも自然を見ること、聞くことから始まる。薔薇の花の香りをかぎ、その美しさをたたえる気持と、花の形状を調べようとする気持の間には、大きな隔たりはない。しかし、薔薇の詩をつくるのと顕微鏡を持ち出すのでは、もう方向が違っていている。科学はどんどん進歩して、たくさん専門に分かれてしまった。いろんな器械がごちゃごちゃに並んでいる実験室、わけの分らぬ数式がどこまでも続く書物、もうそこには詩の影も形も見えない。科学者とはつまり詩を忘れた人である。詩を失った人である。そんな一度失った詩は、もはや科学の世界にはもどって来ないのだろうか。詩というものは気まぐれなものである。ここにあるだろうと思つて一生懸命に探しても、詩が見つかる

るとは限らないのである。ごみごみした実験室の片隅で、科学者はときどき思いがけなく詩を発見するのである。素人目にはちっとも面白くない数式の中に、専門家は目に見える花よりもずっとずっと美しい自然の姿をありありとみとめるのである。しかし、すべての科学者が隠された自然の詩に気がつくとは限らない。科学の奥底にふたたび自然の美を見出すことは、むしろ少数のすぐれた学者にだけ許された特権であるかも知れない。ただし一人の人によって見つけられた詩は、いくらかでも多くの人にわけることができるのである。いずれにしても、詩と科学は同じところから出発したばかりではなく、行きつく先も同じなのではなからうか。そしてそれが遠く離れているように思われるのは、途中の道筋だけに目をつけるからではなからうか。どちらの道でもずっと先の方までたどって行きさえすれば、だんだん近よってくるのではなからうか。そればかりではない。二つの道はときどき思いがけなく交差することさえあるのである。

○次の詩は戦後まもない昭和23年の作(参考資料3)。原子力について、「夢と希望」を語るがその「危険性」も訴えている。紙面の都合で一部省略する。

「原子と人間」

人間はまだこの世に生まれていなかった
アメリバもまだ見えなかった
原子はしかし既にそこにあった
水素原子もあった
ウラン原子もあった
原子はいつできたのか
どこでどうしてできたのか
誰も知らない
兎に角そこには原子があった

原子は絶えず動き回っていた
長い長い時間が経過していった
水素原子と酸素原子がぶつかって水ができた
岩ができた
土ができた

原子が沢山集まって複雑な分子ができた
いつのまにかアメーバが動きだした
しまいには人間さえも生れてきた
原子はその間も絶えず活動していた
水の中でも土の中でも
アメーバの中でも

そして人間の身体の中でも
人間はしかしまだ原子を知らなかった
人間の目には見えなかったからである

また長い時間が経過した
人間はゆっくりゆっくりと未開時代から脱却しつつあった
(中略)

やがて二十世紀が訪れた
科学者は何度も驚かねばならなかった
何度も反省せねばならなかった
原子の本当の姿は人間の心に描かれていたのとはすっかり
違っていた

科学者の努力はしかし無駄ではなかった
「原子とは何か」という間に今度こそ間違いのない答がで
きるようになった

「原子核は更に分割できるか それが人間の力でできるか」
これが残された問題であった

この最後の問に対する答は何であつたか
「しかり」と科学者が答える時がきた
実験室の片隅で原子核が破壊されただけではなかった

遂に原子爆弾が炸裂したのだ
遂に原子と人間とが直面することになったのだ
巨大な原子力が人間の手に入ったのだ
(中略)

原子時代が到来した
人々は輝かしい未来を望んだ
人間は遂に原子を征服したのか
いやいやまだ安心はできない
人間が「火」を見つけたのは遠い遠い昔である
人間は火をあらゆる方向に駆使してきた
しかし火の危険性は今日でもまだ残っている
火の用心は大切だ
放火犯人が一人もいないとはいえない
原子の力をもっと大きい
原子はもっと危険なものだ
原子を征服できたと安心してはならない
人間同志の和解が大切だ
人間自身の向上が必要だ

世界は原子と人間からなる
人間は原子を知った
そこから大きな希望が湧いてきた
そこにはしかし大きな危険もひかえていた
私どもは希望を持とう
そして皆で力をあわせて
危険を避けながら
どこまでも進んでゆこう

参考資料

- 1) 三河アララギ、P 40、第57巻、第3号 (2010)
- 2) <http://hatrine.web.fc2.com/matome/studying/text/others.html>
- 3) <http://blogs.imedia.co.jp/ten/2011/04/23-b3f3.html>

短歌に詠まれた茂吉―あるいは茂吉を詠んだ歌人―

「月虹」 鮫島 満

二十一 四賀光子

四賀光子は、大正四年に歌誌「潮音」を創刊主宰した太田水穂の夫人であり、水穂没後はその「潮音」を継いで主宰した。

会合にも出でぬは病むか弱るかと言なれと思ひあふるる
『双飛燕』 昭和二十六年

論争の直ぐなりしかばその誠かたみかたみに知りいますらし

この二首を収める『双飛燕』は水穂・光子の合同歌集である。この二首には、「老夫―茂吉大人より水穂へ文たまふ」と註がある。

一首目は、茂吉が水穂に宛てた「先般宮中にも又きのふの文部省の総会にもお見えになられませんでしたので御たいぎの御事かと心配いたしました」という昭和二十四年五月の書簡のことを詠んだものと思われる。「会合」は書簡中の「文部省の総会」のことであり、書簡中の「宮中」は、この年ともに日本芸術院会員として皇居での陪食に

招かれたことをいう。

二首目は二十数年前の病雁論争に触れている。水穂と茂吉のこの論争は熾烈なものだった。発端は、昭和四年十一月号の「アララギ」の茂吉の歌、「よひよひの露ひえまさるこの原に病雁^{びやう}おちてしばしだに居よ」に対して水穂が「病雁」は芭蕉の象徴の模倣だと批判したことだった。

以前から写生説について対立していた二人の駁論は今回は八ヶ月にわたった。茂吉の書いた論争文は四百字詰め原稿用紙にして三八〇枚に及ぶ。茂吉の論争の特徴は、徹底した証拠集めと攻める時の語調の激しさにあると言っている。この論争では六歳年長の水穂に対して「歌壇亡者」「増上慢」「低級浅薄非力」などと罵倒している。右の歌は、二人が真剣に立ち向かっていて互いに真情を理解し合っていたにちがいないと推定しているのである。

斎藤氏みまかりますと告げし時顔ゆがめしは哀悼と知る
昭和二十八年

これは前年から病床に臥していた水穂に茂吉の死を告げたときのことを詠んでいる。結語の「知る」ははっきりとわかるという意味であろう。水穂の心に去来した茂吉の姿が偲ばれる一首である。

森ふかく老樹仆るるかそけさよニユースはこよひ君
が死を告ぐ
『白き灣』昭和二十八年

晩年の茂吉は心臓発作に襲われて以来、作歌もままならず外出もきわめて少なくなっていた。その動向を広く知られることもないままに亡くなったことを上の句がよく表している。茂吉の死去が報ぜられたのが「こよひ」だと詠んでいるのは、茂吉の死去は午前十一時すぎ（昭和二十八年二月二十五日）だったがラジオがニユースで報道したのが午後七時であったことをいう。翌二十六日の「朝日新聞」には次のように報じている。

斎藤茂吉氏（歌人・芸術院会員、医博）は心臓ぜんそくのため昨年四月以来東京都新宿区大京町二二の自宅で療養中だったが、二十五日午前十一時二十分死去した。七十歳。遺体は二十六日東大病理学教室で解剖、二十八日火葬に付す。葬儀は学習院長安倍能成氏が委員長となり三月二日午後一時から東京築地本願寺で行い、同二時から三時まで告別式（以下略）と報ぜられている。

三月二日の告別式には九百名が参列したという。弔辞は「アララギ」を代表して土屋文明が読んでいる。

川田大人釈先生も来ていまし項をたれて香たきたま

ふ
老いましてもののたまはね今日までも厳しき思ひ君
ゆ糸にせし
病める獅子森の奥処に昨日までこもりてゐたる莊嚴
は知る
同右

題詞に「二月二十五日斎藤茂吉氏逝く」とある一連中の作で右の「森ふかく」に続く。茂吉の遺体は翌二十六日には解剖されているからこれらは二十五日の通夜のときを詠んだものだろう。

一首目はその通夜の席には茂吉と親しかった川田順もかつて「アララギ」の仲間だった釈迢空も来て焼香をしていたと詠む。この迢空もこの年の九月に亡くなり、病床に臥す太田水穂は翌々年に亡くなる。近代短歌の終焉をこのころとする説の根拠である。

二首目の意味は正確には解せないが、敬語が用いられていない下の句の主体は作者であろうか。夫・水穂との論争などを念頭に置いているの思いをいうのであろうか。

三首目では、さきに茂吉を森の「老樹」にたとえたのと同様、その偉大さを「獅子」にたとえている。伝え聞く茂吉の闘病のようすを「莊嚴」と言っているのである。

楽しい時間 26

山本紀久雄

2014年11月30日

清話会主催の「ミャンマービジネス視察旅行会・2014年11月11日(火)～15日(土)」に参加して、ヤンゴン周辺を回ってきた。ミャンマーには以前から興味を持っていた。それはミャンマーが「最後のフロンティア」と呼ばれているからである。

「最後のフロンティア」と称される理由、それは人口規模の割に、国民所得が低いからである。隣国のタイが人口6700万人(2013年)で一人当たりGDP 5778ドル(2013年)に対し、ミャンマーは人口が5200万人(2013年)、一人当たりGDP 869ドル(2013年)と、人口はタイの78%規模であるのに、一人当たりGDPはタイの15%にすぎない。したがって、現在の外資導入策を継続すれば、経済成長率は最高9.5%程度に達し、2030年には一人当たりGDPが現在のタイに匹敵する水準になるとの予測がなされている。(アジア開発銀行)

そこで日本企業は「東南アジアの最西端に、人口5200万人を超える市場がある。今後、経済改革や民主化が進み、長期的に経済成長を遂げることは間違いないだろう。その巨大な可能性を秘めたミャンマーのマーケットに対し、まだ、十分な企業が進出していない。ならば、競合他社よりも早い段階でミャンマー市場を開拓したい。その足掛かりとして、駐在員事務所や支店をつくりたい」と考えるのは当然であり、まさに「最後のフロンティア」といわれる所以で、毎日のようにその進出ぶりが新聞報道されている。

このようにミャンマーへ進出する企業が増え続けているが、これから検討する企業の場合、最も重要で大事なことは、個別の業種実態把握の前に大局観を持つことと、そこから得た感覚と実態に触れた読み・予測という二項目が必須条件である。

大局観とは物事を俯瞰して判断することであるから、ミャンマーの全体を把握せず、見聞きした一部の事実にとらわれることは危険である。

そこで、今回の「楽しい時間」では以下の三項目で三回にわたって検討を展開したい。

①ミャンマーを大局観で見る↓「最後のフロンティア」であるが、ビジネス進出は当然にヤンゴン市から展開するという結論になるだろう

②ミャンマーの現実をいくつかの場面からレポートする⇒現状把握である

③以上の前提から進出好適事例の分析⇒今後の進出へのヒントにつなげる

まずはミャンマー全体の把握から入りたいが、ミャンマー情報入手については、ミャンマー民主化2011年以前については制約条件が付く。

ミャンマーは1988年に軍事クーデターが起き、軍事政権に完全に移行した。その後1990年の総選挙でスー・チー氏率いるNLD(国民民主連盟)が圧勝したが国会は開催されなく、かえって、スー・チー氏の自宅軟禁が続いたもので、米国は1997年にミャンマーに対する新規投資を禁止した。この制裁発動以前に投資していた事業の継続は認められたものの、米欧での消費者不買運動等も高まり、多くの米欧系企業が撤退し、アメリカによる経済制裁強化もあって、日本企業も多くミャンマーから手を引いたので、2011年以降の

ミャンマー動向のみに詳しいというのが日本企業の実態で、背景情報が時間的に途絶えている。

したがって、ミャンマーへの基本的認識において薄くなっている。例えば「ミャンマーとは135もの民族により構成される連邦国家である」ことを正確に認識している人は少ないのではないか。

さらに、今でも少数民族との武装戦争が行われている国であるが、ようやく2013年7月15日、ミャンマーのテイン・セイン大統領が英国で講演し、1948年にビルマの国名で英国から独立した時以来続く、10以上ある少数民族と政府との戦闘について「数週間以内には停戦が実現するだろう」と楽観的な見方を示したが、果してどうなのかという疑問は残るが、ヤンゴン市に限れば、ミャンマー市場は魅力的になる。というのも、ヤンゴンで過ごした4日間、どこに行っても

人で溢れている。人を運ぶバスや小型トラックの中で、人がすし詰め満員状態である。しかし、人が多いということは経済成長の前提条件であって、日本の人口減状態とは全く異なるわけで、ヤンゴン市場としての魅力は高い。ヤンゴン市の人口は、近年急速に増加しており、1998年は247万人であったものが、2011年には514万人と年平均2.58%の高い伸び率を示しているし「ヤンゴン市は乗用車の普及拡大の目安とされる一人当たりGDPが3000ドルに近づいている」



(日経新聞2014年11月25日)というほどで、いよいよ日本再登場機運が熟した気運の2013年5月、安倍首相が訪問しテイン・セイン大統領との会談で大盤振る舞いを行った。まず、5024億円の延滞債務の全額解消と、新たな円借款510億円、無償資金・技術協力費400億円の計910億円、これを2013年中に執行すると約束した。また、ヤンゴン近郊のティラワ経済特区を視察し「日本とミャンマーの経済協力の特徴だ。絶対に成功させなければならない」と力説した。加えて、2014年11月、東南アジア諸国連合(ASEAN)で再訪問した安倍首相は、テイン・セイン大統領にミャンマーのインフラ整備のため総額260億円の円借款供与を伝えた。この円借款はヤンゴンの配電網改善や、港湾整備、中小企業向け金融が対象であるが、前年に続く大盤振る舞いにヤンゴンでは大きな話題となった。

というのもこの安倍首相のミャンマー滞在時期に、今回の清話会ビジネス視察旅行会が開催されたわけで、現地で安倍首相の動きを垣間見ることができたのである。

ミャンマー政府は、ティラワ経済特区を環境開発モデル地区として、それをヤンゴンに活かそうとしているのだが、そのヤンゴン市開発マスタープランはどうなっているのだろうか。これについては夕食を一緒にした、ヤンゴン在住の台湾人建築士女性が「それもJICAがつくっている」と発言したが、その通りでそこまで日本が関わっているのである。

このように日本が関与を深めていくヤンゴンが最も経済的に活発な地区であるから、当然に日本企業が進出するのはヤンゴン市中心になるのではないかと、というのが4日間の大全局観である。当然と言えば当然の分析結果だが、何ごとも自分で大全局観を確認するという行動をとることが戦略づくりには必要であり、その思考行動をとるのが「楽しい時間」だ。

永平寺と斉藤茂吉

夏目勝弘

歌集「ともしびに」に永平寺吟、アララギ第四回安居會の歌三十三首が載っていた。

安居會はどのようなことをするかと、茂吉の日記を調べる。

八月二日火曜日。天気吉。大安吉日。そして八月六日土曜日。永平寺。アララギ安居會第五日。無事終了。と五日間の日付が書いてあるのみ、そこで前回の安居會を調べてみた。

第二回は比叡山で七月三十日～八月二日まで、安居會の内容はなく「紅き日」が林間に出づ。近江の海を目がけに見る。等その時その時の思いが数多く書かれている。

第三回の三峯山の安居會では、午前四時起床、大神ノ前二家内安全ノ祈願アリ。朝食後、散歩、午前八「作歌ニツイテノ神髓」ニツイテ講演スル（中略）○午後八土屋君の旅人ノ講義アリ。

安居會のことより終了後の東京まで帰りの行動が事こまかに書かれている。歌に関することはなく、茂吉の性格が出ていて面白い。

ここでは取り上げず、各安居會での歌を見てもうことにする。比叡山安居會（歌集「ともしび」より）

大正十四年七月二十八日より五日間、比叡山上にて第二回アララギ安居會を催す。講師、岡麓、島木赤彦、斉藤茂吉、中村憲吉、土屋文明。作歌若干を録す。

○比叡山のいただきにして歌がたりわがともがら飽くこともなし

○わが受けし火難ののちの悲しみをこの夏山にやはらむとす
○ある時はあわただしきも雲まよふ佛の山にその雲を詠む

第三回アララギ安居會（三峯山上）

○二つ居りて啼くこゑきけば相呼ばふ鳥が音かなし山の月夜に
○山のうへに光あまねく月照りて真木の木立にきほひ啼く鳥
永平寺吟

アララギ第四回安居會

○大き聖いましし山ゆながれる水ゆたかにて心たぬしも
大仏寺途上

○うつせみの苦しみ歎くころさへはやあはあはし山のみ寺に
玲瓏巖

○大き聖この山なかの岩にゐて腹へりしときに下りゆきけむか
門外・帰途

○ほのぐらき承陽殿のあかつきに石のたたみに額を伏したり
永平寺漫吟補遺

○志比川の谷を入り来てうらやすし杉生のなかの落葉を見れば
八月四日より八日に亘り、紀州高野山清浄心院に於て第六回安居會を開く

○高野山あかつきがたの鉾杉に狭霧は立ちぬ秋といはぬに
第七回安居會（大澤禪寺）

○この寺に七日きほひて歌がたりきはめむとして来りし吾を
第八回アララギ安居會、自八月二日至八月六日於比叡山上宿殿
○九とせ前にこの山に起臥しことをおもへばわれば老いたり
昭和九年よりは夏季歌會として八月三日より五日まで青山會館別館とあり、これ以後は夏季歌會となっている。

「氷魚」のことから (168) 岡本八千代

今日は時雨がぼつぼつと降っている。庭の萩の黄葉^{もみぢ}がしつとりと垂れて黄金色だ。寂びしそうだけれど私は嬉しい。心はずむ。

それは、松山の子規記念博物館長の竹田美喜先生から直筆のおハガキをいただいたことだ。毎月、贈呈の「三河アラギ」の「お礼のおことば」、また私の歌にも「我が日々を見るような思いが」とも「松山では子規のこと」「のぼさん」「マゲのぼさん」とも呼んでいます」「今月末にドナルド・キーン先生が松山にお見えになる」ことなど書かれていた。そして、「道後一番町、三津口の間を走っていた道後鉄道の道後駅、側にある茶店の温泉塩の看板も目立ち当時のままの古風な色美しい絵ハガキであった。私の一生の宝物だ。

さて、子規たちの「詩会」の連中は「どこか景色のいい山の中へ遊びにゆこう」ということがもちあがって、岩谷へ行くことになった。この岩谷というところは、松山の南方約七里の地点久萬町の郊外で、四国八十八ヶ所の一霊場ある地であった。

- ・ 彼らが行ったのは夏であったが寒かった。なぜ、そこへ行ったかは、仲間に梅木という秀才の少年がいて、この地の出で案内してくれたのだった。
- ・ 一夜を久萬の旅情で過ごした。みんな作詩に耽った。
- ・ 翌日は、帰り道となる。三坂峠を越えねばならぬので。(約

三里) 難所だ。

確かに景色はいい。この時、子規は十五歳、我々(三並良)たちは二歳年長者であったので、苦労はまあまあ。

・ 子規は、年少者で、そう頑健でもなかったたので途中で疲れてしまった。

・ 我々は、子規を中にして、子規の手を肩にかけ、助けて歩いた。

・ 森松辺に来て、松山城が見える頃には夕暮になってしまった。子規はついに歩けなくなった。

・ 村の人に教えてもらって、人力車夫の百姓さんに頼んで、やつと車に乗せた。

・ 子規のこと「身体は弱い方だったが、意志が強いというのか剛情な男だった」「決して所信を曲げるようなことはしなかった」「時にはぷりぷり怒り出すこと(いつぷり)で困る」とも。

・ しかし、「情は非常に厚く、親切で人に教えて倦むことを知らなかった、人でもあった。と三並兄はいう。また、上京後のことであったが学校の作文の宿題を添作してもらったことも」と。

・ 子規は、「何時までもいつまでもかかって、自分の気に入るようになるまでは、筆をおかず、直してもらおう私の方で閉口したことが度々あった」と述懐している三並良さんのことば。

次回は子規の中学入学明治十二年頃へ――。

ことのはスケッチ (433) 今 泉 由 利

『アントニオ・ガウディ』

外国での私の経験は、闇雲にはじめてしまった船旅の末、辿り着いたアルゼンチン、未知だった國で「セリーナさん」にめぐり遇えたこと。彼女の庇護のもと、彼女を通して、知らなかったことを知ってゆけた日々。セリーナさんが心について、そして私。

スペインがルーツのセリーナさんは、胸元に「受難のキリスト像の金のネックレスをされていた。キリストの苦を共に『されておられたのでしょうか。あまりに気の毒なキリストのお姿に、私は「はやく、十字架から降ろして下さい」と願っている。

バルセロナにきて、バルセロナを歩いて、サグラダ・ファミリアに着いた。今まだ建築中の大きな幕に覆われている所があるまま、天に突き出るカトリック教会。

今どき、ネットで予約が出来、あちこちの行列を後目にどこでも楽々入ってゆかれた建物の天を仰ぐほど高く天井を見上げ「セリーナさん会いにきましたよ。」と思っていました。こんな凄く、セリーナさんを思い起してしまうものを造り続けた「アントニオ・ガウディ」の一世を私の心に刻みたい。

ガウディは、スペイン・カタルニャ出身の建築家。アーノルヌーボー期のバルセロナを中心に活動。ガウディ家の先祖は17世紀にフランスからスペインにやってきた。

ガウディは、銅板を加工して鍋やかまを作る銅細工職人の家系に生まれ、病弱だったため他の子供達と遊ぶことはむつか

しかったけれど、紙細工で家を作ったりしていた。学校に入學すると、友人と三人で雑誌「エル・アルレキン（道化という意味）」を発行した。ガウディは挿絵を担当し、学校の行事の際には、大道具や小道具など制作した。

三人は、タラゴナのローマ遺跡や、ポブレ・修道院見学にゆき、当時、廃墟となっていた修道院の修復計画をたてたり、水彩画を、描いたりした。

後、ガウディは、バルセロナで建築を学ぶ。学業と平行し、いくつかの建築設計事務所働き、公園の装飾や修道院の装飾にもかかわった。パリ万国博覧会に出展するクメーリヤ手袋店のショーケースのデザインを、この作品を見初めた繊維会社を経営する富豪エウビオ・クエルが、その後40年あまりパトロンとしてガウディを支援した。

1883年、サグラダ・ファミリア専任建築家に推薦され、その建築に全精力を注ぐ。パマセロナの財政危機により建設が進まないこと、パトロンのグエルが死去したこと。

1925年ガウディは、サグラダ・ファミリアに引越し、作業に集中する。

1926年、ミサに向かうガウディは路面電車に轢かれ、浮浪者とまちがわれ手当が遅れ、死亡。サグラダ・ファミリアに埋葬される。初恋がかなわず、終生独身であった。

「美しい形は構造的に安定している。構造は自然から学ばなければならぬ」

数学や方程式によらず、実験装置「逆さ吊り模型」。網状に重りを数個取り付け、その網の描く形態を上下反転した。垂直加重に対する自然で丈夫な構造形態と考えた。

神とバルセロナの人々の意志により現在も建設は進められている。

編集室だより 二〇一四年 十一月

◆平成二十六年十二月号の三河アララギ賞。

「氷魚」のことから（167） 岡本八千代先生

167回に渡る連載。沢山の事々、沢山のお心、沢山のお言葉、大きな余韻：言い尽せません。ありがとうございます。

○ブランチ・パーティー。日本からニューヨークへやってきて、仕事をしている女の子達が集まってきて、シェフの由野が御馳走を造り。外国で奮闘している女の子達が、得意部分で助け合いながら：そんな賢さに同席していた。

○J・F・ケネディ空港から、日本へ帰るべく機中の人となる。飛行中、座席のモニターで自らの飛行記録を：ずつとずつと日本に着くまで見ていた。本物の地球の上を飛んできた。ほぼ一万メートルの上空より成田に着陸。日常に戻るのだ。

○日本での蜜蜂の最も古い記録は「日本書紀」皇極天皇の御世。「百済の太子世豊、蜜蜂の房四枚をもって三輪山に放ち養う」。

皇極天皇は斉明天皇としても、二代の皇位につかれた女帝であり、人質として日本に滞在していた。百済皇子を、百済に送るなど、百済と深かった。

○しし座流星群。頭上のオリオン星座のまん中あたり、流れる光りの一瞬。

○上野国立科学博物館。ヒカリ展。光のふしぎ。未知の輝きに迫る。特別展。

光とは、可視光だけではなく、電波、赤外線、紫外線、X線などを含めた広い意味の光について。

ガリレオ、ニュートン、アインシュタイン：見つけだして下されたこと。青色LEDの発明、実用化。今度、地球の夜の色が変わったことを実感。物体に反射され、はじめて「見える」太陽の光。月や星の輝き。人工的な証明光。地球においては、生物の生存に適した温度であったこと。生命を維持してゆくのに必要なエネルギー物質が作られたこと。植物は光合成を行い、草食動物はその植物を摂取し、肉食動物は、草食動物などを摂取し。直接的、間接的に、太陽光エネルギーを源として成り立っている。

広大な宇宙の、様々な光りに満ちあふれ、何億年も何十億年をもかけて地球に、私に、到達する光りのことを思いつつ。

○醍醐天皇、紀貫之らに編集を命じられた日本最古の歌集「古今和歌集」の巻第七、賀歌の部、第三四三番、読み人知らずの歌。

「我が君は千世にやちよにさざれいしのいはとなりて苔のむすまで」がルーツとされ、この歌に、日本古来の雅楽の旋律を取り入れ、長寿を願うお祝の歌として愛唱された歴史もあり、明治十五年、国歌として制定。

○芦花恒春園吟行。

竹林、檜、樺、榎、栗、榊、大王松、百日紅……。古木、雑木林が上手に定まり、とてもとても手入のゆき届いた立派な庭。景色が素晴らしくクリンであり、空気がクリンが伝って気持ちいい。明治、大正が立派に残されていて、文豪徳富蘆花を偲びました。

平成二十七年元旦 三河アララギ会 頌 春						
青木玉枝 (新城市)	安藤和代 (豊川市)	今泉由利 (東京都)	伊与田広子 (豊橋市)	伊藤忠男 (大阪市)		
遠藤脩子 (蒲郡市)	岡本八千代 (蒲郡市)	小野可南子 (豊川市)	清澤範子 (春日井市)	近藤映子 (名古屋市)	小柳千美子 (東京都)	鈴木孝雄 (沼津市)
杉浦恵美子 (蒲郡市)	高山玉由 (USA)	高山由野 (USA)	富岡和子 (東京都)	内藤志げ (豊川市)	夏目勝弘 (豊川市)	林伊佐子 (岡崎市)
半田うめ子 (新城市)	平松温子 (東京都)	平松温子 (東京都)	森岡陽子 (東京都)	山口千恵子 (豊川市)	山本恵子 (豊川市)	弓谷久子 (豊川市)

和菓子街道 (99)

<http://www.trad-sweets.com/>

平 松 温 子

伊勢街道(22)

内宮の天照大御神のお食事を司る神として伊勢に召された豊受大御神を祀る伊勢神宮の外宮。食の神、稲などの穀物をはじめとする農業の神とされ、昔は私の郷土三河の農家の人々は、内宮以上に外宮への崇敬が篤かったようだ。

毎年2月の農閑期に渥美半島から船でやってきて、外宮に集団で参ったそうで、伊勢が近づくと船の上で太鼓をどんとどんと鳴らしたことから、外宮詣での我が三河の人々は「どんどこさん」と呼ばれていたのだとか。私のご先祖様も、「どんどこさん」のひとりだったことがあるのだろうか。そんなことを思いながら、手を合わせる。

外宮門前の味といえば、知る人ぞ知る「みつだんご」。みたらし団



子のようなが、黒糖を煮詰めたタレが絡めてある。三河の甘辛醤油の団子を思っ食べると意表を突かれる伊勢の昔ながらの団子だ。

◆野むらの

住所：三重県伊勢市吹上2-4-12

電話：0596-28-4077

お知らせ

▽二月号の原稿は、一月一日(木)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。郵便の休配(日曜、祝日)を考えあわせて早目に送付してください。

※掲載ずみの原稿は毎月の三河アララギ誌と共に返送しますので、返送用封筒は不用です。

原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A
〒一一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

編集三河便り

△本棚の整理をしていると、黄ばんだ二十年も昔の「三河アララギ」が出できた。

長い間続いてきたこの冊子に、今は亡き先生方、又諸先輩、今も 出詠が続いている人たちなどの歌が載っている。

今は亡き先輩たちの歌を読み返していると、そのすばらしさ、その人となりがはつきりと浮んでくる。いろいろ勉強した歌会が偲ばれる。これか先もずっと続いていくことを願いつつなつかしく思ったひとときでした。(山口)

三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを必要とする。

◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができる。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月一日より、半ヶ年分一万円、一カ年分二万円の割で前納されたい。ただし、購読会員は、半ヶ年分二千元、一カ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様ただちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができる。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十六年十二月二十五日印刷 第六十二巻 第一号
平成二十七年一月一日発行 定価 六 百 円

編集部

岡本 八千代・小野 可南子・夏目 勝弘
平松 裕子・山口 千恵子

発行人 発行所

今泉 由利
三河アララギ会

三河アララギ発行所 〒一一四一〇〇三二
東京都北区王子本町一の二六の六A
TEL (〇三)五九二四一二〇六五
振替口座 〇〇八三〇一六一五六三三九
E-mail yuri88@cronos.ocn.ne.jp
Homepage <http://maizumiyuri.jp/>

印刷所

株式会社 桜 創 美